



今に満足せず、  
常に新しいことを考え、  
可能性のある事業に挑戦する

グローバルに多様な事業を行うオリックスについて、それゆえに何を行っている会社かわかりにくいといわれることがあります。私はオリックスというのは、業種の枠を超えた、世界にも比較対象のない、「オリックス」という独自のビジネスモデルだと考えています。オリックスの一番の特長は、自らを型にはめたり、何かに限定したり縛られることなく、何でもできるということです。面白いと思えばすぐに取り組み、もしうまくいかなければ止めればよいと考えます。規模の割には、小回りの利く会社といえるかもしれません。

オリックスが何でもできるのは、基本となる体の動かし方というのがしっかりとできているからだと思います。外から見ると、どうしてオリックスが水族館や空港の運営を行っているのかと思われることもあるようですが、リースから周辺分野へと事業領域を広げてきた私たちの歩みを振り返ると、これらの運営は不動産の施設運営という現在の事業からさらに一歩進んだ隣にあるという位置づけです。何でもできるというのは、何でもやる、とは違います。どのようなリスクがあるかを慎重に洗い出す一方で、どうやったらそのリスクを減らして取り組めるかを前向きに考え抜いた上で、やるという結論を出しています。また、この時に力を発揮するのが、多様な事業の持つ専門性です。これは専門性のある人材がグループに多くいるということではありません。こういった人材が協力して、一人では考えもつかないような新しいアイデアや解決策を作り出すのがオリックスの当然の動き方となっています。一方、慎重に考え抜いて取り組んだ事業だからといって、残念ながらすべてが成功するとは限りません。

過去には、予想を超える市況の変動を受けて、大きく傷んでしまった事業がありました。オリックスではこれをそのまま諦めることはなく、どうしたら価値を上げられるかということに力を尽くします。さらには、その過程で得られた知見やノウハウを次の事業にも活かします。失敗を失敗で終わらせずにプラスに変えるというのも、オリックスの基本の動き方となっています。

何でもできるオリックスの将来像を描くというのは、なかなか難しいことです。実際に、これまでもおよそ5年ごとに事業の内容が変わってきています。これからも型にはまらない会社として、さまざまなことに挑戦を続けます。そうすることで事業はさらに変化し、5年後には今とは全く違うオリックスになっているかもしれません。

私は今に満足していません。常に新しいことを考え、可能性のある事業に挑戦し続けたいと思います。何でもできるということは、成長の可能性も無限にあるということです。挑戦なくして成長はありませんし、オリックスらしさも失われ、普通のわかりやすい会社になってしまうと思います。わかりにくい会社としての存在感をさらに高め、「オリックス」自体が業種の一つと認められることを目指して、グループの先頭に立ってオリックスの成長を牽引してまいります。

取締役 兼 代表執行役社長  
グループCEO

井上亮